

第三編 第三三章

第五節 第百二十六師團の作戦

第一 第百二十六師團の編制

(一) 師團編制の大要

部隊指揮 編制の細部 編成要旨 摘要

第百二十六師團司令部

三月十日

一、百二十六師團長 志保長 彦彦
兼 司令部 三月十日

歩兵第三百七十七聯隊

本部、三大、通信、歩兵

〃

半森 第五團 坂本 聯隊
を基に編成

歩兵第三百七十八聯隊

〃

〃

坂本 第三團 坂本 聯隊
を基に編成

歩兵第三百七十九聯隊

〃

六月十日

坂本 第三團 坂本 聯隊
を基に編成

野砲兵第三百二十六聯隊

本部、三大、眼隊、列力

〃

三月十日 野砲兵 志保 聯隊
を基に編成

第百二十六師團工兵隊

本部、四小

三月十日

工兵隊の本部、三大、眼隊
を基に編成

第百二十六師團機進大隊

本部、四中、行軍、古月十日

師團機進本部、眼隊、古月十日
出給隊

第百二十六師團通信隊

三月十日

通信隊本部、古月十日

步兵第二百七十七聯隊長	大佐	山本義雄	27期
步兵第二百七十八聯隊長	〃	山中隆平	29期
步兵第二百七十九聯隊長	〃	菊池永雄	26期
野砲兵第二百七十六聯隊長	少佐	木庭一之	少12期
第二百七十六師團牙兵隊長	〃	高野光衛	少15期
第二百七十六師團挺進隊長	大尉	近藤實	特志
第二百七十六師團通信隊長	中尉	長岡義信	特志
第二百七十六師團輜重隊長	少佐	山森正治	少14期
第二百七十六師團兵器勤務隊長	少尉	平川康次	予授
第二百七十六師團病馬隊長	大尉	小岩井	少14期

第三 日蘇開戦直前に於ける蘇連軍の動向

(一) イマン附近南行列車の状況

昭和三年四月、五月、六月間イマン附近南行列車の搭載軍需品中、戦車及自動車は約八千輛、火砲及鉄舟等多數目撃せり

(二) 課者の活動積極化

年森河ハ哈達河ルート、梨樹鎮ハ鶏窠河ルート等師團正而に於ても多數の鮮僑人を使用し買収たす情報の蒐集に努めあり當時蘇連側近衛中隊某の言に依れば是等課者には多數の金を賜へ少くも三月位滿洲に優入せしめありと殊に六、七月頃には哈達河、鶏窠河

更

近に謀者のボストを設り、林軍の移動の状況を諜知
 せしめ、あつと暗砲を撃ちしむ。在任滿鮮人の保護に
 あつしを以て之を捕殺は困難なり。
 (三) 半截河南方瓊山附近に於て越境築城の密施
 昭和三年七月廿日頃瓊山附近國境(正)に於て越境し
 正面(正)未は厚約一週間連続毎日(正)30名以上の兵力を
 以て築城を密施し其態度挑戦的なりしも其力
 國境監視隊は関東軍の規定に則り積極的行動を
 採り、専ら敵動向視察に終始せり
 尚該正面の敵陣内の兵力の移動相當監視化
 せしむるを目的なり

(四)八月廿日敵約百名越境我力警備隊を攻撃す事事件

八月廿日正午頃于巨屯國境警備隊(常林南方40軒)を

長為越境約百名警備隊を襲撃す事(常林南方40軒)を

中自動車三輛に傷つて連射約20名はウスリ

岸の上より眼鏡により我が警備隊を視察す

なく敵歩兵百名はウスリ河を渡りし警備隊東

方一々降参に現出逐次警備隊方面に散開前

進し約八百米に於て城を搜索す我は全

員陣地に據り戦斗を準備す未だ射撃を周

始せず敵は六百米迄進撃す其後全く前進せず

又射撃せず草むらに伏臥し其附近に一

尾

<p>附 頁</p>	<p>帯の草葉にして草淫く伏臥せし金銀目現し得ず</p>	<p>日坂に至りて後退の模様ありしとの報に接するや庫内</p>	<p>相田彦謙を凍せし疎遠状況も細取せしめし七日</p>	<p>に多敵影と認めたりとの現地の報告により安堵あり</p>	<p>日坂の各回境に於ける敵の動向特々本事件は近々</p>	<p>敵は何卒かの企圖を有するものと判断するも今更</p>	<p>には開戦に至るを専らとすとの一般の推測あり</p>	<p> </p>
----------------	------------------------------	---------------------------------	------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	------------------------------	----------

第三開戦前蘇聯の動向に對し日本軍の判断並に処置

(一) 第五軍情報主任の判断

五、六月頃

米軍内地に上陸に呼應し^{蘇聯}連^軍協同侵入を企圖公算あり

其の時機は九月以降降なりん

七月下旬

最近頃^{蘇聯}連^軍の動向が変化せり鑑し日蘇戦近きに

及ぶや

(二) 第五軍情報主任の判断

七月下旬以後

國境に於り^{蘇聯}連^軍の動向が変化せり現況に於ては

近と重大事件の発生を見事^{(3)にあり}や^(其の事件が)或は^(其の)用^(其の)敷^(其の)の^(其の)動^(其の)機^(其の)と^(其の)
近^(其の)に^(其の)あり^(其の)や^(其の)

三右利新に基き第五軍一の処置

1 移後一自典^(其の)一七^(其の)星^(其の)間^(其の)築^(其の)城^(其の)の^(其の)迅^(其の)速^(其の)な^(其の)る^(其の)遂^(其の)行^(其の)

2 築城地帯内に速に人員兵器彈藥等の送附

3 軍人家族を整理し、牡丹江附近に集結

4 兵器^(其の)及^(其の)化^(其の)身^(其の)物^(其の)教^(其の)自^(其の)動^(其の)車^(其の)廠^(其の) 補^(其の)院^(其の)等^(其の)を^(其の)牡^(其の)丹^(其の)江^(其の)附^(其の)近^(其の)

近に移動

5 軍司令部を東安より桓^(其の)仁^(其の)に^(其の)移^(其の)動^(其の)

6 関^(其の)東^(其の)を^(其の)顧^(其の)慮^(其の)し^(其の)て^(其の)司^(其の)令^(其の)部^(其の)隊^(其の)の^(其の)宣^(其の)施^(其の)

7 防衛^(其の)備^(其の)置^(其の)と^(其の)七^(其の)日^(其の)下^(其の)旬^(其の)宣^(其の)施^(其の)し^(其の)特^(其の)に^(其の)同^(其の)隊^(其の)時^(其の)却^(其の)人^(其の)処^(其の)置^(其の)

に對し者、特職員に指示

(三) 右利新に基き第百二十六師團の位置

1. 七月師团长は国境警備隊を巡視し閑秋時敵の

不意急襲に對慮す。存意警備隊防禦計畫に關心す。

指導(自軍)加 研究と訓練の實施を要求す

2. 築城の迅速なる遂行に關し各隊を督促す

3. 自軍屯の築城を利用し敵機銃化突破隊に對

す藉下隊下隊長に現地指導準備を八月日より

五日間實施す

4. 編制未定了部隊の迅速なる完了と築城地域内に

人員の配教並に兵器彈藥等の搬送を要求す

促進

陸軍

兼四

日蘇開戦より停戦に至る迄の第百平六師団

戦斗経過の大要(関係軍の師団行動も附記) 要目第一

(一)昭和三年八月八日夜半越境して敵飛行隊の爆音に

より眠りを醒まし此間もなく國境警備隊は優勢を敵

の攻撃を受けたり報に接し師団情報科は直ちに軍司令部

に報告と共に師団長にも報告す

当時師団長及幕僚は第五軍司令部に留まり存続

可なり

(二)我が國境警備隊は隘路に於ては所により防禦

に就きたるに敵は國境裡警備隊地を突破して直ちに警備

隊所在地より平陽及八面道警備隊共九日十日兩日に

三
夏

其防地の大車を以て領せしむ敵は十日夕其の先鋒部隊
 を以て鷄籠一八面通下城子の線に近きなり

(三) 敵は十日より樺平軍圍の主力を以て穆後陣地を各一
 を以て瑞道・自興屯陣地を以て十日夕迄に樺
 該線を突破す

(四) 軍は十日敵樺甲軍の強と其の主力穆後一牡丹江道を
 突進しあるを以て1260及1350の主力を以て連に樺河地
 区に轉進を命ず 兩師團は十日夜行動を開始
 行軍並に鉄道輸送により樺河十日夕より十一日夕
 至り間に樺河附近に到着直ちに1260は四道歩を
 附近に1350は樺林附近に陣地を設け 穆後一四道歩

途中の敵機甲部隊の攻撃を破砕すべく企図す

(五) 敵は十三日麻石石附近の我が肉攻部隊を以て突破し

十四日及十五日の両日四道峯及樺林南方陣地の我が軍

に攻撃を加ふ我軍は火砲、肉攻、第一師団部隊の奮闘

によりよく該陣地は我が抗戦し敵に大なる損害を

與へたるも敵は優勢なる戦車と火砲を以て攻撃を

及復せしため十五日迄は我が陣地の大半敵の手に

歸せり

(六) 軍は十五日夜暗を初用し先づ牡丹江左岸の樺林

引續き敵を我が機銃隊を以て牡丹江右岸一安城

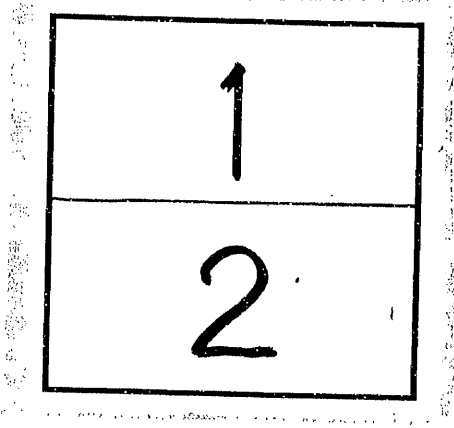
一樺道は子道を樺道は子に後退し後園を築き

三
尾

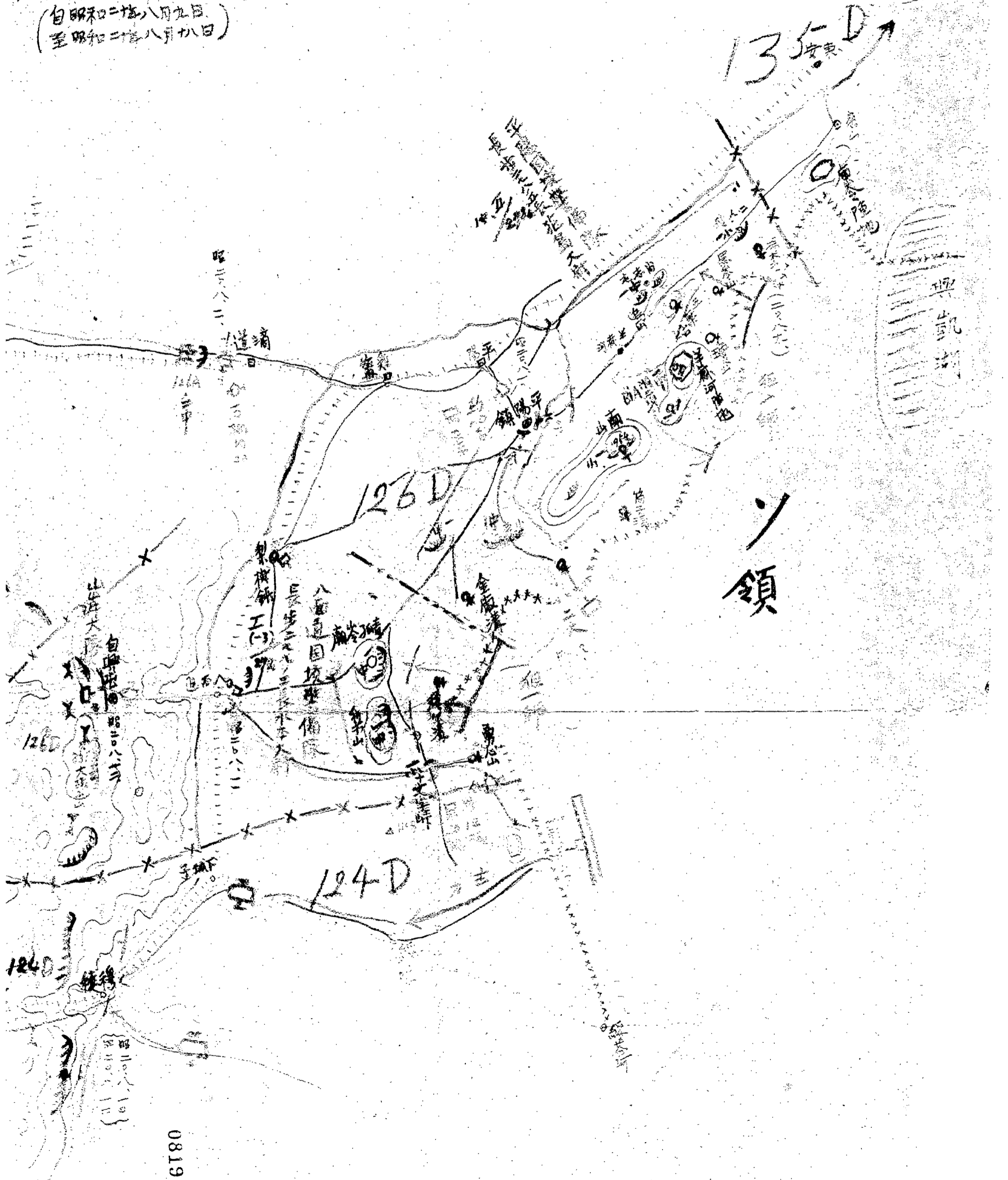
了に瑠野

御園は十六日午寄板根牡丹江市附近に後退、十七日夜
安城屯附近は二大休止、十七日夕方に板根横道あり
に到着、同地に設隔せし陣地に就き一つありとす、
軍の停駐に關し了人命令を呈呈せり

分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	第126師団戦斗経過大要
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

石田大將軍戰鬥經過圖
(自昭和二十八年八月九日
至昭和二十八年八月十八日)



第百二十六師團戰鬥經過圖
 (自昭和二年八月九日
 至昭和二年八月八日)

↑
 500



0820

0819

第二平陽地區國境警備隊の戦斗（要目其ニ参照）

(一)開戦時警備大隊長の知得也了状況は如置

八月八日夜は月少し小雨銀りに降り何となく凄惨の氣満

ちありしと一突如夜半日異様耳に轟と其に南方に爆音を

聞き間もなく越境せる敵機を認め

2.國境親衛隊隊所に敵機の銃聲を聞く尚若親衛隊

の電話は全く不通なり

3.九日二時瓊山親衛隊隊所^は敵の攻撃を受け全滅

せり此の傳令によき敵機を受け

同時頃半截河西方陣地に連絡せる銃聲起り

4.大隊長は事態急変を察し平陽師團情報所に報告

尾

ありと及に南炭高志屯警備隊と連絡せしむるに未だ敵
襲ありしは両者共団境視察班は各所敵の攻撃
を受けあがぬしと報告し來り

二に於て大隊長は念々日蘇間最^に近^に來^りしもの^を判断し
各型備隊に隊の指しせし防禦計畫に基き^て戦斗を
準備すべく命ず

(二)平陽團境型備隊防禦計畫の概要

一方針

はるべく長く現在線に於て敵を拒止す(已むを得ずれば是れ
は先づ平陽に解後梨核鎮を経て師団主力陣地に
後退す

二 指定す要領

一 警備隊は高志屯一平森河一南山一川原台の線は正面を縮小
しなほへく長く敵を拒止す一之カ為ニ之班、高志屯の兵力は
一部を高志屯に其他は平森河陣地には集結す

二 川原台は平陽方面に對し鐵路をも以て該警備隊は
陣地を死守す

三 平森河北方橋梁及平陽橋梁は連日一部隊を派遣し之を
破壊し敵列車の突進を防止す

四 平陽附近後區後の行動は状況に依り定む

三 平陽地区國境警備隊の戦斗

三
尾

平陽地区圍繞警備隊正面に進出せし敵は粗撃一
 師団内外なるもの如く其力を黒谷金山瓊山方面に指
 向せり此の方面は 全く我カ配備の間隙なりと見て
 敵は疾風の勢を以て約四軒前進せり然るに日本軍の配備完全
 敵軍の調査の情状と相違せしむるは日本軍の
 街中には陥入りたる懸念し部隊を約半日停止せしめたり
 (戦後敵師団長の言) 然るに全く我カ部隊の無事を云ふ
 九日夕刻敵は一部を以て半截河陣地に力を半截河
 東方には居結せり
 当時大隊長は未だ半截河陣地を敵の攻撃を受け
 ざるも其両側至る皆後を包圍せり此の明十日に於ては
 全く孤軍に陥ることを明かすを以て本隊長は九日夜半

平陽附近に後退すに決し夜暗に乘し間道に依り先づ
平陽鎮に後退せしに夜内行軍達滞し十日九時同地に
到着せり

^{大隊長は}敵の一部を小麻台營地を突破し平陽鎮

西側に進出せしめしと知り木陣水止一部を以て半截す

方向の敵を拒止せしめ主力を以て平陽鎮西方の敵を攻撃

すに決し二に十日十三時頃より平陽鎮都落に於て激

烈なる戦斗を惹起し敵は衆を恃り戦はざるを以て

果敢なる戦斗を継続し彼等提督の乱闘は十日十六時頃

大隊長傷死し將校大半戦死す部隊も殆どと戦斗力

を失ひたり 夜に入ると 第三中隊衣伊三郎少尉は附也

尾

		<p>の兵に長巻を命し敵線を突破後退す</p>	<p>本戦中は一歩進みし兵員約八百五十名中戦死傷六百</p>	<p>五十名あり</p>	<p>敵の損害は銃力損耗以上多し比明瞭なり</p>						
--	--	-------------------------	--------------------------------	--------------	---------------------------	--	--	--	--	--	--

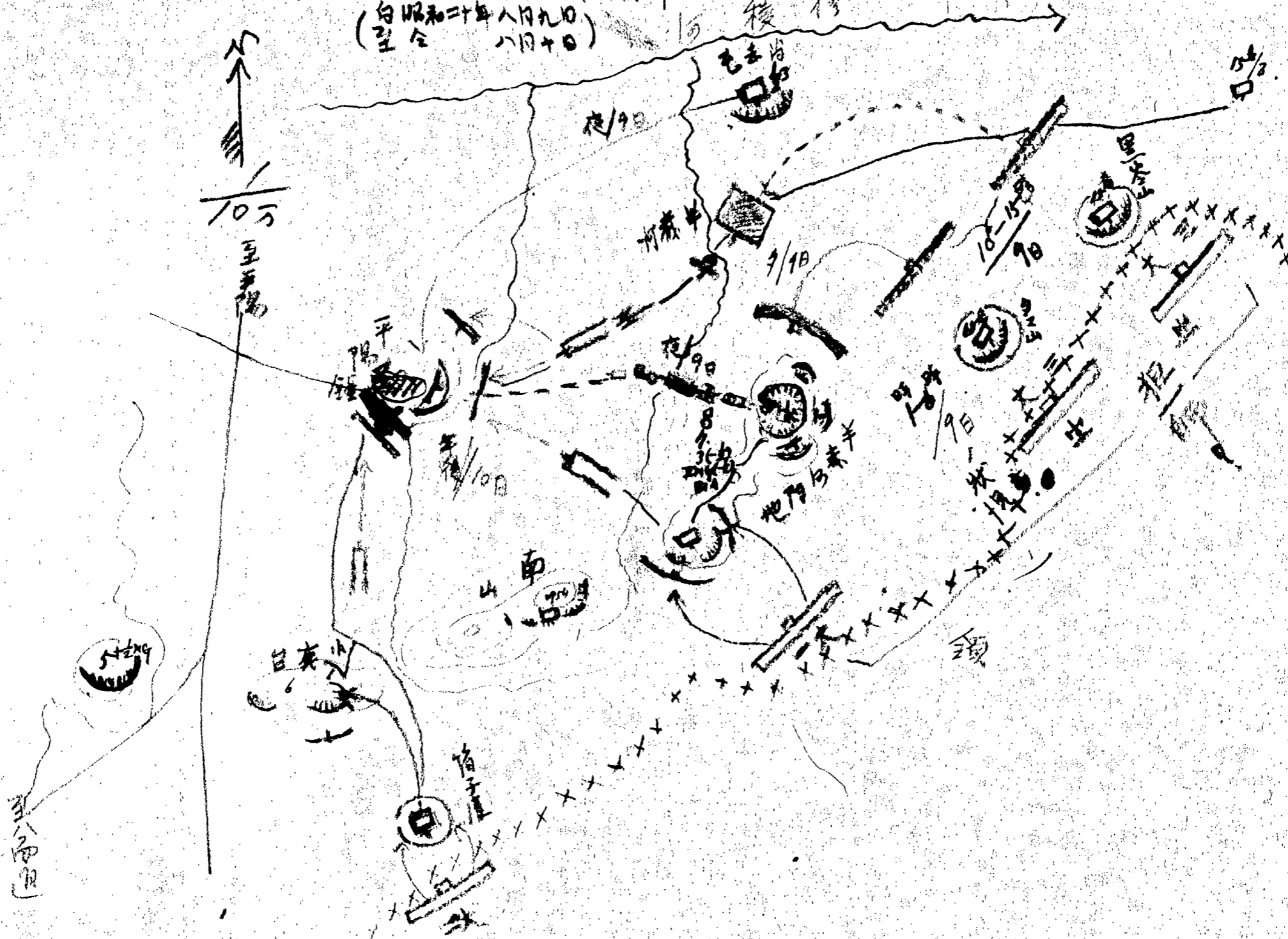
附
頁

平陽地区圍城警備隊駐屯位置圖

(白根和二十年八月九日
至今 八月十日)

1688

西本圖其二



0827

第八方面通地區國境警備隊の戦闘

(要目)

(一) 戦闘前の状況

1. 当警備隊正面國境一帯は密林多く且日蘇兩國共
に配備の手が掛かる上に相當國境より離隔しあり従て

國境紛争問題なきも敵謀者の出入多かりき

2. 十文字峠、初木山、青孤峯、廟、梨樹鎮の線は昭和十九年

度夏冬季築城を實施し初木山に二大隊、青孤峯、

に一大隊の哨、堅固な防戦陣地程度之の工事を行ひ引

續き昭和二十年度には増強計畫を遂行し四月より夏

施せしむる第五軍より川の内、地掃出せり中止と

なす従て守備兵力に比し正西邊廣且敵の隱蔽近接

五
四

容易な地域を以て防禦戦中の遂行困難なる方面より

(二)八面通地区國境警備隊防禦計畫の概要

方針

初木山、青月孤峯廟八面通間の警備地域に於てなるべく
長く敵を拒止す

指導要領

1. 十文字峠、初木山、青月孤峯廟の線を固守す敵の浸透

潜入せしものは^{遊撃}戦により之が根拠を期す

2. 敵機甲部隊の^{前道橋}の徹底的に道路の破壊を行ふ

3. 八面通東側高地に敵の抵抗を誘ひ兵營の焼却を

実施す

(三) 戦斗経過の大要

八月九日未明より敵飛行機の越境西進せし状況を目撃し
 予や大隊長は直ちに各型に備隊に戦斗準備を命じ
 師団並に隣接要備隊と連絡せし敵は全正面攻撃予
 を實施中あり直敵を撃つに急事電天ありと知れ
 予は速に備隊と連絡を密にし極力敵情の収集に勉むる
 と共に在八面通各部隊を却寄せし戦斗配置に就かしめ
 道路橋樑の阻絶破壊を實施す
 二十九日十時頃梨山部隊より秋皮溝は本未明敵一隊の
 攻撃を受け全隊戦死せりとの報に接す十三時頃より敵
 の有力部隊が密林内を西進中ありとの報に接す未だ梨山

陸 軍

青孤峯廟に敵を見ず

十日拂脱梨山に敵の砲撃を多ク受ケルニ三方隊の敵は攻撃前進中心之半傷隊は目下陣地により激戦中なりと報に接す引續て青孤峯廟に敵の攻撃を受けし報に接す此と見兩者並に電話不通とす

八時頃十文字岨警備隊より敵TK十輛^敵輛自動車を三輛

は彼月台方向より前進し来り目下我カ警備隊を攻撃

中より^{の報に接し爾後}東に電話不通とす

大隊は第一隊部隊に乘馬傳令を派遣し情報の蒐

集に勉む

十文字岨警備隊の隊士

樹を備隊正面に現れし銃車は先づ其の兵舎を射撃す
 十時頃兵舎は炎を生じ隊も森林に延焼す之は有部
 隊TKの前進を阻止せしむ自動車搭載の歩兵森林
 内を潛入攻撃せしむる戦車射撃と相俵つて死傷甚出
 多し警備隊長川上少尉は銃車との戦力不初り。を察知
 す。又森林を利用し後退せしむ八面道に在る道路を阻
 絶破壊し敵TKの前進を阻止しつ。つ逐次八面道に向い
 後退せり

多利木山警備隊の戦斗

十日十時頃先づ敵の砲撃を受けり。遂に敵陣地の間隔
 と交渉侵入正午頃より各所混戦となり。所地守備隊

見
 見

よく頑強に抵抗し屢々敵を撃退す。此の優勢なる敵は
反覆攻撃を實施し陣地宇兵の糧食と共に逐次奪食
せし。同日夕には中隊長以下死せし。初歩山陣地も全く
敵手に降せり。

青砥山廟壘陥落の戦斗

壘を陥落は正午頃より攻撃せし。宇兵もよく奮闘し
地形又敵の近接容易らぶりにより十日夕迄に陣地南
端の一角のみ敵の巨銃せる所とありし。他に健在す。西歩山
陣地敵手に降す。や敵は林カ右側背に續々侵入し。中
隊長は同夜八面通に後退す。詰し中隊長は果てし
詰りの復奪せし。間道に依り八面通東方高地に拂脱す。

到着大隊の指揮下は此方

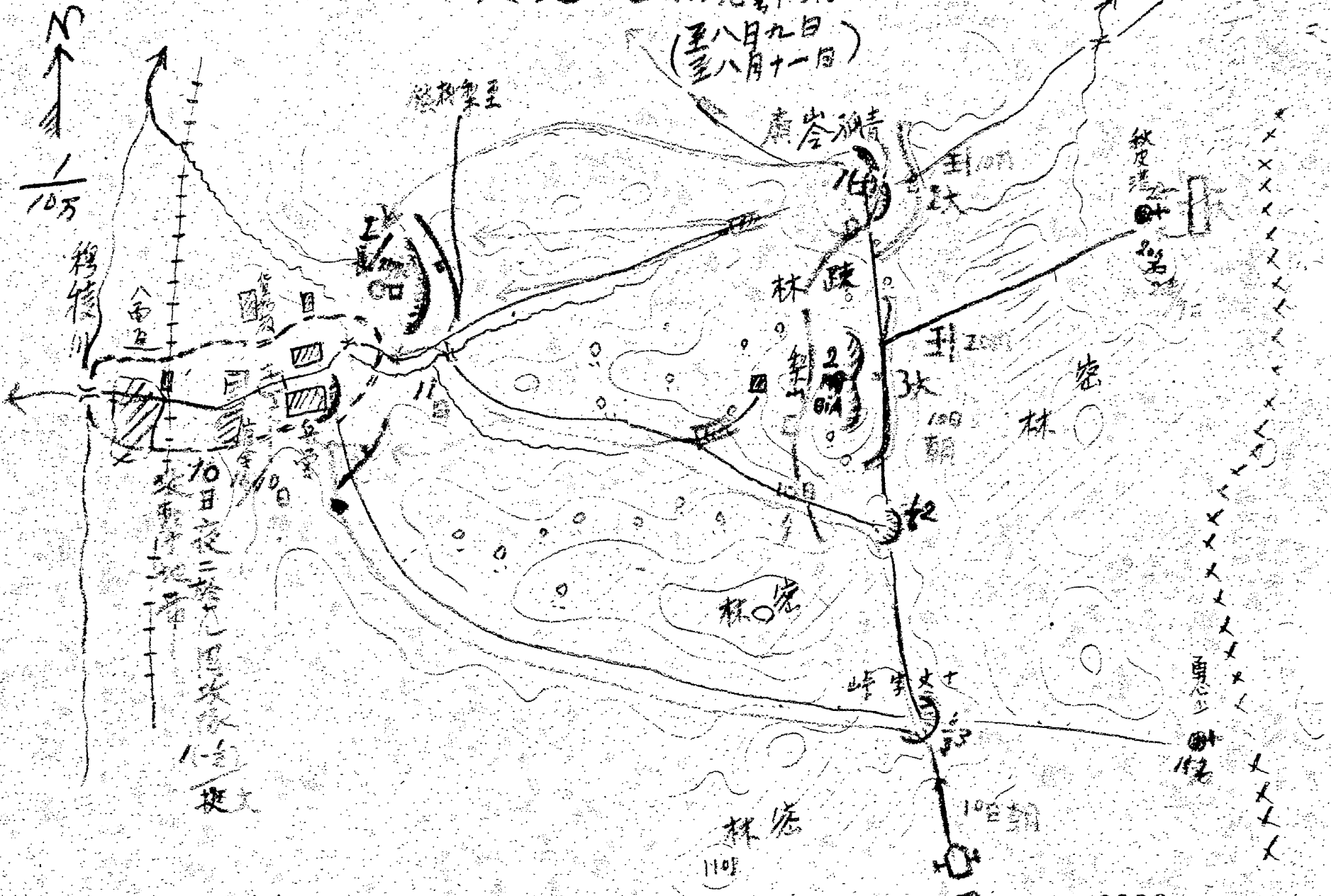
八面通附近の戦事

十日十六時頃敵隊車十数輛八面通に侵入然様は
 大隊中隊の主力は全員集結を指示し因^道に
 撃つを宣^て敵隊の大部は損害を蒙りし威力不充
 分へ三乃七の保^衛隊の爲一時行動を阻止せしむるなり
 十一日早朝より敵隊は逐次八面通車側及南側に退去して
 先づ砲隊を閉^鎖し終りて我々の協力を以て我力陣地は
 近^す我部隊よく奮闘すべしと此裝備の劣悪は^戦に
 損害を増加するの^虞あり十一日正午頃八面通より敵隊は退去し
 (四)八面通地区の損害の概数

八面通地區國境警備隊戰鬥終結要圖

1697

(至八月九日)
(至八月十一日)



第七 自興屯附近殊置部隊の戦斗

(一) 八月十日夜師団主力は権柄地区に転進を命ぜられ自興屯陣

地殊置部隊(長山岸中尉 功^功/37A 計^計/陸軍)を以て八面通方向

の敵を一時拒止し師団主力及135Dの轉進を容易ならしむ

(二) 敵機甲部隊は十日八面通を西進同日午後自興屯附近に到

着^着我が速射砲の射撃も内攻部隊の攻撃も大なる成果

を挙げて得たり敵機は我陣地に射撃を加へる同案を以て

破仙洞方面に前進せり

當時我が部隊は山頂にありて寧ろ敵が去るとの戦斗を準備す

十二日十時頃敵が去る三、四米^米砲平内は自興屯附近に現出

正午頃よりB高地に對し猛烈なる集中砲火を以て制圧し

敵は先は逐次北方に迂回す大隊はA高地の兵力を抽出し
 してC高地に配置し^{北面の取降下り}敵の迂回に備ふ
 敵は逐次砲火をCに移す^{敵の}森林を利用し逐次Cに
 近接す銃撃は敵砲火の損害を減少す方西側斜面を
 占領敵先は火撃を交ふ優勢あり敵は逐次^を側北に近
 近死日夕刻に遂にB及びC高地を敵の占領す所と
 す
 夜間大隊長は殊射の兵を召集し高地に向ひ反撃を加へ
 一時突撃は成功せし間もなく敵は奪回せらる
 大隊長は十三日拂坂近に更なる南方森林内に陣地を占領す
 敵は一部を以て兵力軍を監視し主力を以て仙洞方面に前進

を開始す

（其力に乏しに敵少しあり亂生す）

茲に於て大隊長は殊有る其力を集結西南方に後退師団

主力に合を^行進中山地内日行進のたみ御事遂落し

十六日又推得東北高地に退去せし敵既に牡丹江附近

に退去せざるを^知り東京陸に向い前進途中停戦を

知り二十日東京城附近に^て武裝解除せたり

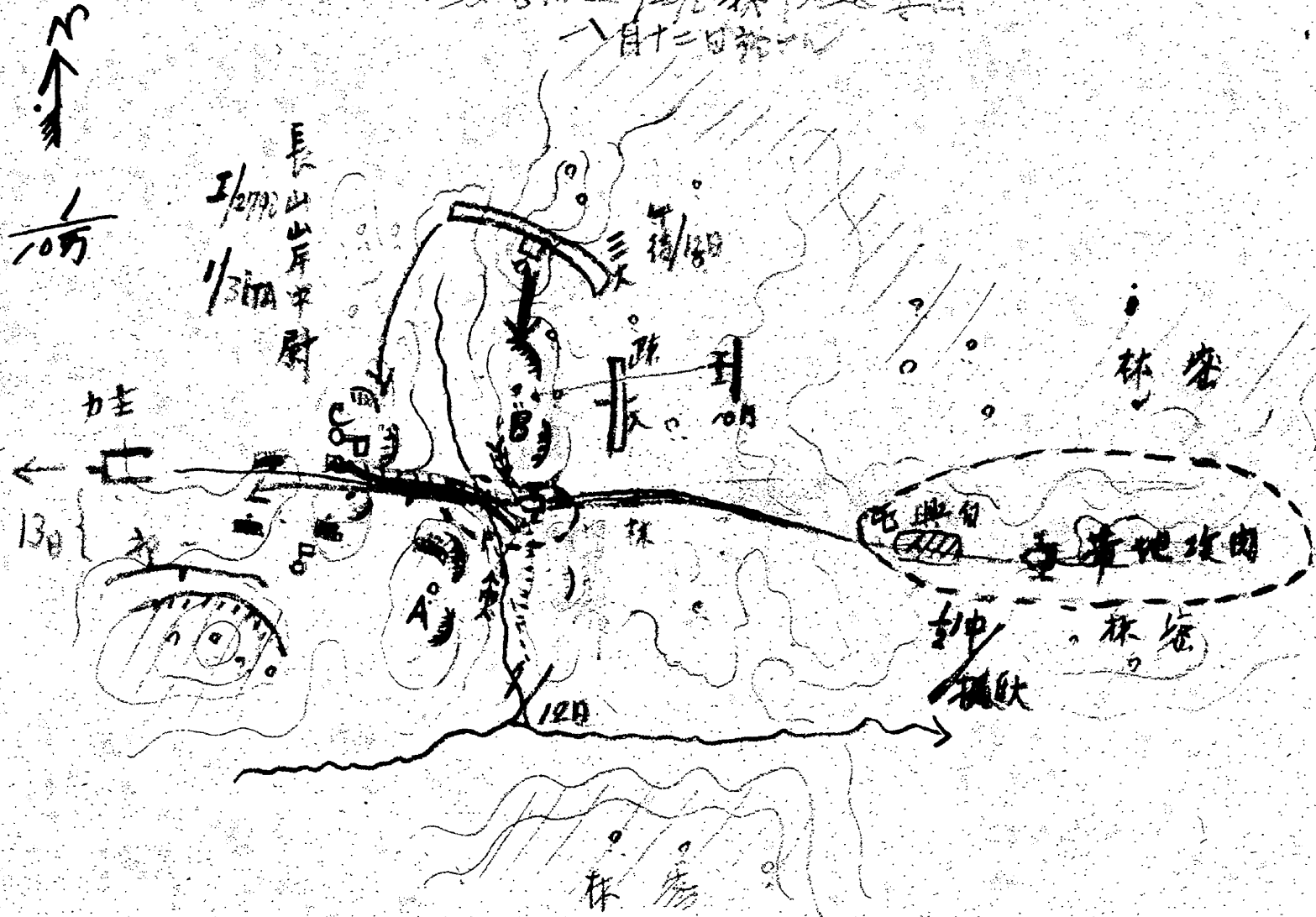
(三) 本島斗に於て^我捕獲

我軍兵力約^{六五〇}名内戦死約^{四〇〇}

連射砲四大隊砲二門三破壊せり

尾

自長崎至江戶/259: 察遊邊要圖
一月十二日繪



第八牡丹江東方愛河附近の戦斗（要図は別紙）

(一) 師団主力自興屯より転進部留者

敵機甲軍の主力穆稜、磨刀石、牡丹江道に指向せりま、
や軍は1260の主力及1350の一部を十日十八時穆稜河附近に転進を
命ず

師団は軍命令に基き同日夜左記の如く轉進を部留す。

(二) 師団轉進要領

左縦隊本隊（月行軍序列）

長 2790 長 菊地大佐

2790 (-I) 2264 (-IV) 317A (-I) 126T 由 兵 勤 126P 23/15P

左縦隊後衛

10日20時自興屯花崗山麓仙洞橋

道を穆稜河に

師団司令部は品に依り先行

2790 (-I) は仙洞より鉄道により日夕

差 軍

<p>278 (35) 師団挺進大隊</p>	<p>右縦隊 277c (-II-1) (IX-9) II/126A</p>	<p>(四) 自興屯陣地殊死部隊</p>	<p>I/279c 1/31TA 1/31 挺進</p>	<p>II/277c</p>	<p>12日午後一部の敵隊戦車後方に挺進す師団挺進大隊主力は屢々肉攻を實施し敵戦車を阻止す挺進大隊長近藤大尉戦死す</p>
<p>其他は12日夕迄に掖河に到着</p>	<p>20時陣地を襲つた地へ城子権林道を掖河に</p>	<p>12日夕掖河に到着</p>	<p>自興屯西方陣地を占領師団の転進掩護</p>	<p>192高地を確保1240の左側掩護1240長の指揮下に入す</p>	<p></p>

(二) 愛河附近陣地占領要領

師團長は土月正午頃、樋野第五軍司令部に到着す、や軍

司令部より左記要旨の軍命令を受く

第五軍命令 八月十一日十二時

一、敵機甲軍は目下、樋野附近に於て1240と激戦中あり

二、軍は牡丹江以東に於て敵機甲軍の攻撃を破碎

せんとす

三、第百二十六師團は茨基屯附近より、化装物敷高地、四道峯

を経て標高370高地に亘り陣地を占領、敵機甲軍の攻撃

を破碎すべし

SA甲1250換止大隊 23/15時、戦車四輛を配属す、

陸 一頁

四 其他畧

右軍命令は基を師團の命令左記の如し

第百二十六師團命令 八月十七日十七時

一 敵機甲軍は目下穆稜附近に於て激戦中なり

二 師團は英基屯附近より貨物廠高地、四道峯を経て

標高371高地に亘り陣地を占領し穆稜方向より前進

中の敵機甲部隊の攻撃を破砕せんとす

三 2770(西)は右地区偵察部隊となり英基屯東方高地に南面

し陣地を占領すべし特に英基屯南方小橋の線に對

し隊中障礙を設備すべし

四 2780(西) (貨物廠型部隊を指揮は屬す)は中地区隊となり

貨物廠南方高地に東南面して障地を占領すべし

同為地東側斜而脚に射撃車障礙を設備すべし

五、(一) 左地区は射撃部隊とあり主力を以て四道山合高地

に一部を以て標高70高地を占領すべし

特に四道山合附近本道上に既置せし師団工兵隊と密

に協力すべし

古巖斗地域の境界を左の如し

右

中、地区間 兵營廠南端 築基高地東南に射撃車を運ぶ路

左、地区間 旧兵隊隊舎南端 貨物廠北端

貨物廠東側水流の線

七、砲兵隊(ⅡA及ⅡA-Ⅰ中属)は主力を以て旧兵隊隊舎附近に

一部を以て標高371高地西側凹地に陣地を占領し
 全兵力を四道峯高地東側峰に本道に別な地区に
 各一部を中地区正面に標高371高地前面に指す
 如く火力を準備すべし
 八五兵隊(2師)は四道峯部隊に位置し四道峯を西側
 水流(谷)より四道峯東方二村の小流に至る間に對し
 離車障礙を設備すると共に肉薄攻撃の爲の
 蝮毒薬を準備すべし
 九挺進大隊(長1350挺進隊1260及1350挺進大隊)は四道峯を西側
 小流(谷)より推し東端に亘る間に因攻の爲めなるべく
 多くの蝮毒薬を準備すべし